

No.

人生の大きき山岳を、また一つ自分ほろしる
 にした。

十年一昔だといふ。すると自分の生れたふ
 とはもうむかしの、むかしの、むかしの、そ
 のまた昔の事である。まだ、すべてが昨日今
 日のよろはばかりおもはれてゐるのに、いつ
 のまにそんなふにすぎさつてしまつたのか。一

No.

生とは、ふんふ、短いものだらうか。おれでよ
 いのか。だが、それだからいつかは貴いので
 あらう。

そして永遠を思慕するものの寂しさがあ
 る。

ふりかへつてみると、自分もたぐさんの詩
 を~~愛~~かいてきた。よくかろして書きつづけてき
 たものだ。

その詩が、よし、どんあものであらうと、
 ぶの一すぢ~~雲~~につぶがる境涯をおもへば、

十ノ廿 松屋製

No.

No.

齡の効かもしれふい。

藝術のよい生活はたえられふい。生活のふ

い藝術もたえられふい。藝術が生活か。徹底

は、そのどつちかを撰ばせずにはあかふい。

而も自分にとつては二つあからどちら

も棄てるふとができふい。

おれまでの自分には、とくに大きき悩みがあつた。

十ノ廿 松屋製

(SM) (C-1)

まふとに、まふとに、それは、たずらぶとで
はふい。

おかしより、ふでをもてあそぶ人多くは、

花に耽りて實をそふふひ。實をふのみて風流
をわする。

ふれは芭蕉が感想の一つであるが、ほんと

にそのとほりだ。

自分にも此の境にあつて、よまさらのよる

そふしたふとが、思とひあはされる。

よらにあつた。

No.

No.

それふらふ、んぢのい、まはと問はれたら、ど
うしよう、かの道元の筧、山色はあまりにも

幽遠である。

かゝしてそれを喰べるにあつて、大地の
中からふらふで、馬鈴薯をただ合掌禮拜する
だけの自命である。

詩が書けなくあれは、あるほど、いよいよ、
詩人は詩人にふる。

だんだんと詩が下手にふるので、自命は
れしくてたまらふ。

詩をつくるより田を作れ、といふ。よい
言である。

けれど、それだけのふとである。

善い詩人は詩をふまはず。
まふとの農夫は田に溺れず。

十ノ廿 松屋製

(SM印 G-1)

No.

人間の霊と肉とをそれからそれへとふがえつ
らぬいて、ふれほど深い實在自然の聲があら
うか。

ふれもまたあが俳聖の言葉である。

茨城県イソハマにて。

十ノ廿 松屋製

(SM) C-1

No.

ふれは田と詩ではふい。詩と田ではふい。
田の詩ではふい。詩の田ではふい。詩が田で
はふい。田が詩ではふい。田も詩ではふい。
詩も田ではふい。
ふんといはる。實に、田の田である。詩の
詩である。

花を愛すべし。實ふほ喰ひつべし。

ふんといふ童心めいた悠張りの、たがまた、